シリーズ「国土教育」

オランダ教科書で学ぶ「国土とインフラ」

『まことに世界は神がつくり給うたが、オランダだけはオランダ人がつくったということがよくわかる』。これは、作家・司馬遼太郎が「オランダ紀行」で、13世紀から干拓によって国土を形成してきたオランダ国民を称賛した言葉です。今回は、オランダの中学地理教科書（ThiemeMeulenhoff社、2014―15）で、自国オランダと世界の国々が、そして日本がどのように描かれているかを紹介します。

13世紀から干拓によって国土を形成

欧州のハブ／スキポール空港とロッテルダム港

憲法で「学校創設の自由」「教育理念の自由」「教育方法の自由」が保障されているオランダの教育。オランダには日本のような検定教科書制度はありませんが、地理教科書はオランダの子供たちが「国土やインフラ」を学ぶ教材として確実に機能しています。

自国オランダを学習する最初の単元は『世界の中のオランダ』。6本の滑走路を持つハブ空港「アムステルダム・スキポール空港」の写真を背景に、ゴッホ美術館やアンネフランクの家を訪れる観光客や、チューリップでいっぱいの箱が貨物プラットフォームを出て行く姿を描写する語りで始まります。この単元では、オランダ経済発展の源泉である国際貿易や国際旅客移動と、これらを支える交通インフラ（スキポール空港やヨーロッパ最大のハブ港湾「ロッテルダム港」）の機能や役割について学習します。

オランダ学習の第2単元は『オランダの持続可能性：エネルギーと水管理』。エネルギーに関しては、オランダの主要エネルギー源である天然ガスのほか化石燃料の貢献度と気候変動への影響、省エネルギーや再生可能エネルギー（風力、太陽光、バイオマス）への転換について学びます。

水管理はオランダの生命線

水管理（海岸保護と治水）はオランダの生命線。ライン川河口の大デルタ地帯をはじめとして、国土の大部分が海面下にあるため、オランダでは古くから河川の氾濫や高潮による災害で、大きな被害を繰り返し受けてきました。このため大規模な河川・海岸堤防が築造されてきました。

無数の河川やポルダーからの排水路が張り巡らされているため、その水位管理も重要で、近年は、気候変動と地盤沈下による海面上昇も考慮しなければなりません。

こうしたことを背景として、堤防・水門・堰・水路などの治水施設の運営や干拓地の水位管理は、州や基礎自治体から独立した行政機関である水管理委員会によって一元的に実施されています。本単元後半では、以上の内容をしっかりと学習します。

ロッテルダムの都市再生 国内モビリティーの向上

第3単元『変化するオランダ』では、オランダ第2の都市ロッテルダムの発展の歴史と都市再生、オランダ国内の交通の変化とモビリティーの向上（高速道路の新設・拡張、コンパクトシティー政策、公共交通の活用促進など）、都市と地方の格差について学びます。

第4単元は『オランダの自然力』。ここでは、オランダ～ドイツ～デンマークに至る世界遺産「ワッデン海（干潟）」の形成プロセスと保護・活用について学びます。

以上が自国オランダ学習の骨格ですが、非常にエッジの効いた、バランスのとれた「国土とインフラ」教育であると言えるでしょう。

世界の国々について学ぶ

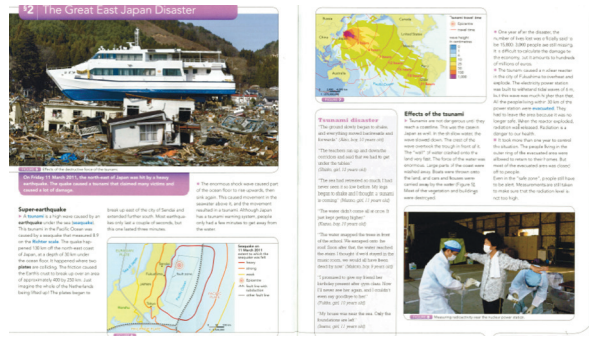
一方、オランダの中学地理教科書では、世界の国々の中から十数カ国（ドイツ、スペイン、ロシア、トルコ、ナイジェリア、南アフリカ、カナダ、米国、チリ、中国、東南アジア諸国、日本など）を取り上げ、各国の地理的特徴を学ぶことになっています。

例えば、ドイツの単元タイトルは『ドイツ：ヨーロッパの中心』。首都ベルリンの歴史と都市の拡大・再生、ドイツの生産力（自動車産業、強力な経済）、少子高齢化を含む人口構造の変化と空間分布などについて学びます。

中国の単元タイトルは『変化する中国』。国土の特徴や人口動態、新興する中国（香港と深圳の発展、急成長する沿岸地域）、農村から都市への移住と都市化、中国北部の環境問題について学びます。

「日本」は自然災害の国

これらに対し、日本の単元タイトルは『日本の自然災害』です。東日本大震災から1週間が経った今も、迎えに来るはずだった両親を待ちながら学校に避難している石巻の小学生の姿＝写真＝で始まるこの単元は、①「なぜ日本では、地震や火山噴火の危険性が高いのか？」について、そのメカニズムが詳細に説明されるとともに、②東日本大震災の津波発生メカニズムと被害の大きさ、福島原子力発電所被害の影響、③台風タラス（平成23年台風第12号／紀伊半島豪雨）の強風と大雨の程度、被害の大きさ、④自然災害への備え（危機管理方策）が詳説されています。わが国の中学地理教科書の学習内容と同等かそれ以上の内容です。



ただ残念なことに、日本の紹介はこれで終了です。自然災害リスクが大きいことを除き、日本の地理的特徴が説明されることはありません。産業や経済、日本文化の独自性など一切の説明が省略されています。こうした地理教育を受けた若い世代が将来のオランダを創る、つまり、オランダ人の対日観はこうして形成されると言うことを認識しなければなりません。

（国土学アナリスト　森田康夫）

道の駅 点描

国道愛好家

松波成行

新型コロナウイルスが予想を超えて世界的に猛威を奮っています。ウイルスは分かりやすくはタンパク質の組織体ですが、あたかも「知」が備わった生命体のごとく変怪を繰り返し、ヒトの急所を突き、社会システムを混乱に陥れています。緊急事態宣言が解除され、日常活動は再開したものの「元の世界」に戻ったわけではありません。

しかし、「元の世界」がより良い世界だったでしょうか。車や電車で長時間かけて通勤することは、今の通信技術で「不要」になっているのではないか。テレワークやウェブ飲み会といった「仮想空間」の人とのつながりを抵抗なく享受できるようになった一方で、「実空間」での人とのつながりや有り難さをおざなりにしていたのではないか。都市への一極集中は国家にとっては弊害であり、国土に見合った分散型のスタイルが国家百年の計として必要ではないのか。人間本来の欲求でもある移動が制限されたことによって、それまでは見えなかった「失われていた世界」があることも分かったのではないでしょうか。

現代社会の「当たり前」が一旦リセットされたことで、冷静に見つめる機会を得たと思います。前向きに捉えれば今の社会システムを脱皮する大きなチャンスになります。道の駅も来客が減って今は苦しくとも、旧来の価値観を一新し、次時代への礎をつくることが、本当の意味でウイルスに克つことになるのではないでしょうか。